

「倉敷や松本がいかにして 『民芸のまち』となったのか」

NPO法人日本景観フォーラム主催
第46回景観セミナー

2015年2月18日(水)

講師 杉山享司(日本民藝館)

はじめに

倉敷や松本は、今では「民芸のまち」として知られています。では、なぜ「民芸のまち」と呼ばれるようになったのか。柳宗悦が提唱した民芸という思想と、それぞれの町における「街づくり」との関わりについて紹介したいと思います。

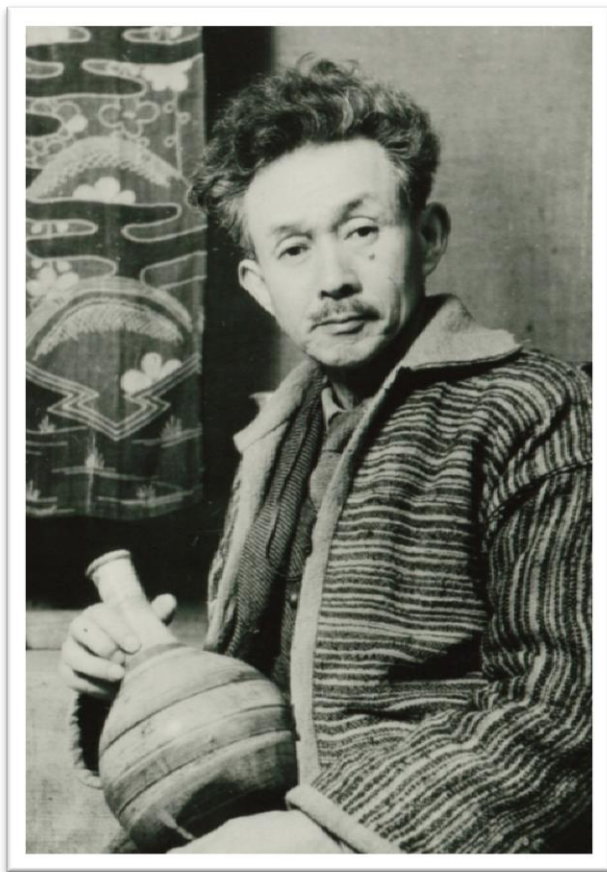
1 柳宗悦と「民芸」の思想

2 「民芸のまち」倉敷

3 「民芸のまち」松本

1、柳 宗悦とはどのような人物か

—民芸美の発見者であり、民芸運動の創始者



- ・無名の職人(工人)の手によってつくられた、民衆の生活道具のなかに美を見出し、それを「民芸」と言い表した。
- ・柳の関心は、単なる「美」の問題を越えて、社会や暮らしのあり方を問うものであった。

柳宗悦の生涯(1889-1961)

東京都港区に生まれる。学習院に学び、1910年には雑誌『白樺』の創刊に参加。東京帝国大学では哲学を学び、新進の宗教哲学者として世に出る。1914年、声楽家の中島兼子と結婚。朝鮮陶磁器との出会いや、木喰仏の発見を契機にして、無名の工人が作る民衆の日常品の美に着目。1925年に「民芸」の新語を作る。1936年、民芸運動の拠点となる日本民芸館を東京・駒場に創設。1957年、文化功労者に選ばれる。長男は工業デザイナーの柳宗理(1915-2011)。

柳宗悦と その家族 (1923年頃)

後列中心が宗悦。
前列右から、
妻・兼子(声楽
家)
二男・宗玄(美術
史家)
長男・宗理(工業
デザイナー)
母・勝子(嘉納治
五郎の姉)



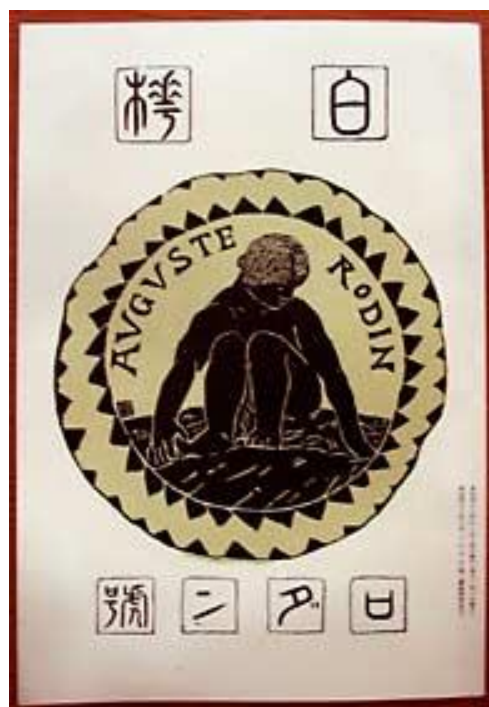
学生時代の柳宗悦

(麻布の自宅書斎にて、1913年)



雑誌『白樺』 表紙

1910(明治43)年



- 『白樺』は個性主義・自由主義を理念に掲げ、人間愛や人道主義に根ざす理想主義を標榜。
- 1923年の関東大震災によって終刊するまで、160冊が刊行。
- 同人には志賀直哉、武者小路実篤、里見弴、児島喜久雄、有島武郎・生馬兄弟らがいた。英国人バーナード・リーチも彼らと親しく交わる。

朝鮮陶磁器との出会い



- 1914年、ソウルから浅川伯教がロダンの彫刻を見るため、我孫子に住む柳宗悦を訪ねる。
- 浅川は手土産として朝鮮時代の「染付草花文面取壺」(瓢形瓶の下半分)を持参。
- 柳はその美しさに心を奪われ、民族の固有の文化や、それを生み出した朝鮮の人々に敬愛の心を寄せていった。

「民芸」の発見

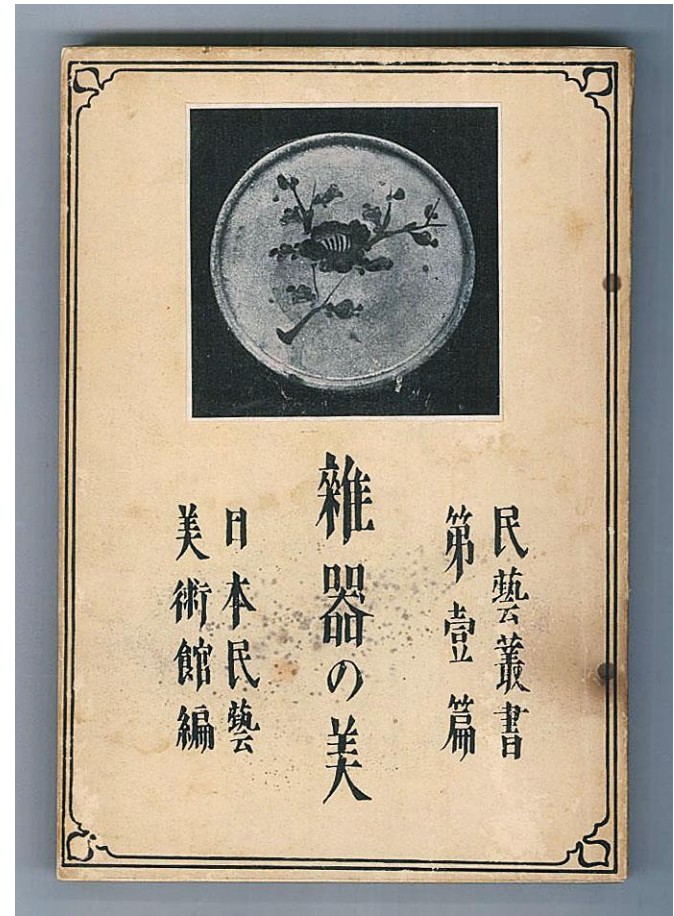


木喰仏(1802年)

- 朝鮮陶磁器との出合を契機に、柳の関心は民族固有の文化やその美に注がれ、その眼差しは「西洋の美術」から「東洋の工芸」へと転じていく。
- 1924年、山梨県甲府で木喰仏を発見。木喰仏調査の旅を開始、その旅が日本各地に残る伝統的な手仕事の美の発見につながっていった。

柳宗悦の発見したもの

- 民衆の用いる日常の生活道具は、その国や民族の固有の生活文化を支えるものである。
- 職人が作った日常品（民芸）には、芸術家が作った美術品に負けるとも劣らない美がある。
- 民芸品には郷土があり、風土の中から湧き上がるようにして生まれた日常品には、「正しい工芸の法則」が現れている。



『雑器の美』（1927年）

「民芸」とは何か

- 「民芸」とは民衆的工芸の略語。「雑器」や「下手物」に代わる語として、1925年に柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎によって作られた、日常の生活に関わる新しい美の概念。
- 鑑賞を主な目的とする美術工芸品に対して、人々の暮らしの中で使われる丈夫で美しい品々のことを民芸品と呼んだ。

民芸品の特性

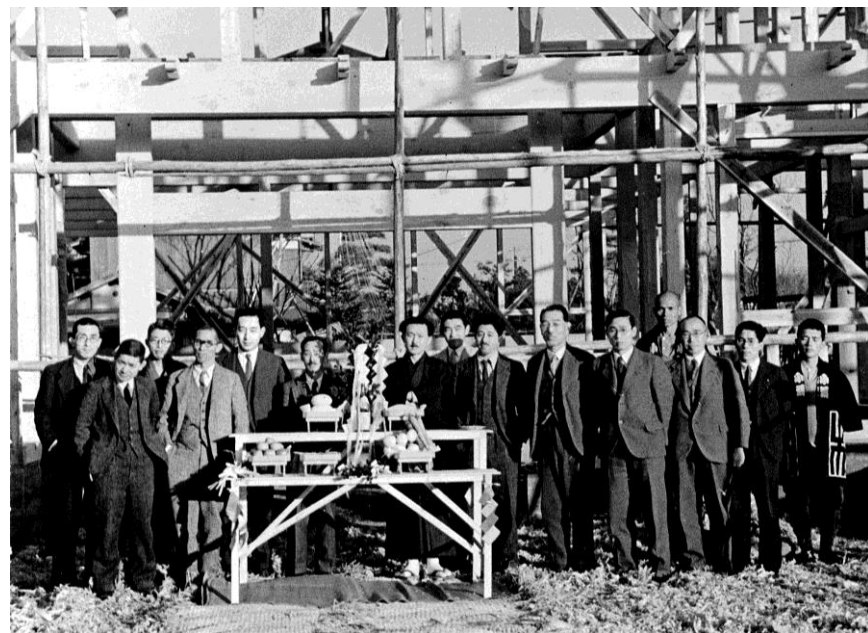
- 民芸品には、「誠実な心」「熟練の技」「自然の恵み」「簡素な形」「健全な姿」「地方色」「実用性」といった特性が宿っている。
- 民芸の美は「平常の美」「親しさの美」「健康の美」「無心の美」である。

日本民芸館の開設

民芸品を紹介し保存するための美術館として、1936年に開設された。本館の建物は国の登録文化財。



上棟式(1936年1月)。左より四人目が河井寛次郎、七人目は柳。右から三人目が濱田庄司



日本民芸館のコレクション



館内の様子(玄関付近)

- 実業家・大原孫三郎氏らの援助を得て、民間の美術館として1936年に設立。柳は初代館長に就任。
- 所蔵品のほとんどは柳宗悦の審美眼により蒐集。国内外の陶磁器・染織品・木漆工品・絵画・金工品・石工品・竹工品など約17000点を収蔵。

日本民芸館の内観



西館(旧柳宗悦邸)



西館(旧柳宗悦邸)の内部

食堂(一階、テーブルは
黒田辰秋作)



書斎(二階、机は黒田辰秋作)



民芸運動とは

- 「暮らしの美」を提唱する生活文化運動。各地に民芸運動の支援者を組織。地域(地方)文化や民芸品の保護や紹介、民芸店の開設などを実践。
- 柳は民芸運動の使命を、
「今も正しく作られている地方の伝統的民芸を紹介し守護すること」
「新しい創造的な民芸の運動を興すこと」
「正しい作家を見出すこと」にあると述べる。

民芸運動とその時代背景

明治以降の急速な近代化により、日本人の生活文化は大きく変化。柳宗悦は、失われていく日本の伝統的な文化を案じ、近代化＝西洋化という安易な流れに警鐘を鳴らした。問題意識の根底には、これまで常に歴史の中に埋没していた「民衆」という存在への共感や、各地域で保持されてきた「固有の文化」への関心があった。

2、「民芸のまち」倉敷



倉敷は、倉敷川の両岸の「倉敷美観地区」(国選定の倉敷川畔伝統的建造物群保存地区)に、大原美術館、倉敷民芸館などの建物が軒を連ねる伝統と文化の街である。舟運に利用された川の両岸には、問屋や蔵屋敷が集中し、それが倉敷の地名の起源となったという。現在、「倉敷」の観光客数は年間600万人という。

いかにして倉敷の街並みが誕生したのか

— 倉敷の街づくりの特色



旧倉敷町役場の洋館
大正6年(1917)築

江戸時代には天領地であった倉敷。明治維新によって社会が大きく変動する中、「商人の町」倉敷では、大原家など地元の有力者により、新たな経済活動や社会事業が展開された。彼らは倉敷の文化の発展にも大きく貢献。大原孫三郎らの発案で川沿いに西洋風や東洋風の建物が建てられる。今日では、それらが周辺の江戸期以来の日本建築や自然環境などと溶け合い、独特な雰囲気醸し出している。

大原孫三郎



大原 孫三郎
(1880～1943)

倉敷の大地主の家に生まれた大原孫三郎は、倉敷紡績(クラボウ)、倉敷絹織(現クラレ)、中国合同銀行(中国銀行の前身)、中国水力電気会社(中国電力の前身)などの社長を務め、関西財界にも重きをなした。社会、文化事業にも熱心に取り組み、倉紡中央病院(現・倉敷中央病院)、大原美術館、大原奨農会農業研究所(現・岡山大学資源生物科学研究所)、大原社会問題研究所(現・法政大学大原社会問題研究所)、私立倉敷商業補習学校(現・岡山県立倉敷商業高等学校)などを設立した。

『わしの眼は十年先が見える 大原孫三郎の生涯』
城山三郎(新潮文庫、1997年)

大原家と民芸運動の関わり

昭和6年頃、大原孫三郎は陶芸家濱田庄司、河井寛次郎、実業家の山本為三郎らを通して、柳宗悦と知遇を得る。大原は柳らとの交流を深め、ついには1935年に日本民芸館設立のために寄付を申し出た。孫三郎の没後は、長男の総一郎が民芸運動の支援者となり尽力。



大原美術館

(日本最初の西洋美術館として、
1930年に開館)

倉敷と街並み保存



旧大原家住宅

(国の重要文化財)

主屋は江戸時代後期の建築

昭和に入り、町並み保存の重要性に着目する人物が出てきた。大原孫三郎の長男総一郎である。彼は「倉敷を日本のローテンブルクにしたい」と考えた。つまり、倉敷の街並みを住民の力で文化的遺産として後世に残すことはできないかと考えたのであった。そして、しだいにこの想いは行政や住民たちに影響を与え、倉敷の街並み保存の活動へとつながっていった。

大原 総一郎



大原 総一郎
(1909～68)

孫三郎の跡を継いだのが長男の総一郎。彼は実業家としての手腕を発揮するばかりでなく、文化事業にも貢献。20世紀の現代美術と日本の近・現代美術の作品や、民芸運動の中心的な指導者たちの作品を収集し、工芸館を設立するなど、孫三郎が築いた大原美術館を充実させた。

また、経済至上主義ではない街づくり、つまり、経済・文化・道徳が完全に調和した街づくりによって、倉敷を地方のモデル都市にと構想したのであった。

『大原総一郎 へこたれない理想主義者』
井上太郎(中公文庫、1998年)

倉敷と民芸運動

- 昭和21年、大原総一郎が招いた柳宗悦の指導で岡山県民芸協会が設立される。
- 昭和23年、大原総一郎が「倉敷の地にもぜひ民芸館を」との思いで、江戸時代後期に建てられた大原家の米倉を提供。それを活用した最初の建物が倉敷民芸館である。民芸の町・倉敷の一つのシンボルとなっている。



倉敷民芸館

外村吉之介と街並み保存

- 初代館長には、牧師をしながら民芸の普及に努めていた、外村吉之介(1898～1993)が招かれる。
- 外村は美観地区の保護にも貢献。倉敷の蔵造り民家を「観光風致地区」に指定するよう全国へ紹介にのり出す。民芸という視点から町並み保存を訴えたのである。



倉敷における建物の保存・再生例

喫茶エル・グレコ

大原家の事務所として大正末期に建てられた建物を活用。「大原美術館で絵を観た人たちが休むための場所がほしい」という大原総一郎の思いを受け、昭和34年に開店



旅館 ぐらしき

(江戸時代の建物や蔵など改築した和風旅館。昭和31年に大原総一郎の肝煎りで造られる。)



倉敷における建物の保存・再生例

「倉敷アイビースクエア」



明治時代の倉敷紡績所をそのまま改装開発したホテル。蔦が絡まる赤レンガの情緒あふれる建物は、日本建設学会賞、日本インテリア・デザイナー協会賞、商業空間デザイン賞などを受賞。ホテル敷地内には、オルゴールミュージゼ・倉紡記念館・アイビースクエア学館、児島虎次郎記念館など多くの施設がある。

3、「民芸のまち」松本

松本は国宝・松本城を中心とした城下町であり、年間549万人が訪れる長野県内有数の観光地。

市内には、明治期に建てられた土蔵作りの建物を利用した民芸店、飲食店、旅館などが点在する。



いかにして松本の街並みが誕生したのか

—松本の街づくりの特色

近年、松本では景観整備がすすみ、電柱の地中化や看板の撤去、黒壁・白壁・ナマコ壁の修復などが行われ、街並みが修復されている。特に松本城の南側の中町（現：中央）一帯は、明治11年の大火以後に建てられた蔵造りの町家などの景観がよく守られている。



松本に生きる民芸の想い

行政による街並み保存事業の背景には、戦後間もなく始まった松本における民芸運動の影響が色濃く反映している。

柳宗悦を終生師と仰いだ、松本民芸家具の創始者である池田三四郎は、「古きを守るも開発なり」という柳の言葉を、自身の生き方の指針とした。



信州と柳宗悦の関係



小林多津衛 一九九二年七月二十八日の座談

柳宗悦と信州（長野県）との関係は、雑誌『白樺』に影響を受けた長野県下のいわゆる白樺派教員との交流に始まる。信州では大正期、白樺派教員たちによる自由、平等、個性を尊重する教育運動がさかんであった。こうした思想的素地が信州の知識人の間にあったことなどが、松本を中心に早い段階で民芸運動を根付かせたのだろう。

松本と柳宗悦 - 三代澤と丸山



松本と柳宗悦を最初に結びつけたのは、三代澤本寿(1909—2002)であった。松本で生まれた三代澤は、1935年に静岡へ転居。染色家芹沢銈介に師事し、民芸運動に参加する。一方、三代澤の旧友である丸山太郎(1909—1984)も、開館して間もない日本民芸館を訪れるなど、次第に民芸の思想に心を引かれていった。

日本民芸協会長野県支部の結成



日本民芸協会長野県支部発会
(1946年5月) 前列左より三代澤、
濱田、柳、丸山、下条

1946年、三代澤、丸山、下条寛一が中心となり、日本民芸協会長野県支部が結成される。松本の街には昔から手仕事の職人が多く住み、手工芸が盛んな所であった。

下条は松本市の行政に関わる立場から、民芸運動による戦後の復興を目指した。

松本における民芸運動

地元の熱意と行政の支援を受けながら、柳、濱田、河井、リーチ、黒田辰秋といった民芸運動を担う人々が、松本を度々訪れる。そして、家具や木工、手織紬、ホームスパンといった分野の指導にあたった。



木工指導の折(昭和28年)

前列左より 柳宗悦、バーナード・リーチ、
河井寛次郎、黒田辰秋
後列左より 三代澤本寿、荻原小太郎、
柳澤次男

松本民芸家具

丸山、三代澤の旧友である池田三四郎(1909－1999)が、1948年に民芸運動に参加する。池田は民芸の思想を自ら主宰する松本民芸家具で実践。松本の和家具の伝統を活かし、日本人のための和風洋家具の道を拓いていった。



柳宗悦考案による
スツールとテーブル(1955年)

松本民芸家具ゆかりの店舗

「珈琲 まるも」と隣接する「旅館まるも」は、民芸ファンに人気の旅館・喫茶店。外観白壁の店内は松本民芸家具で統一されている。



昭和31年(1956年)松本民芸家具の創業者 池田三四郎が設計。柳宗悦も度々通った。



民芸運動ゆかりの店舗

「ちきりや工芸店」。元々は「ちきりや」という老舗問屋。その長男として生まれた丸山太郎が、1947年に開いた。丸山は松本民芸館の創立者としても知られる。

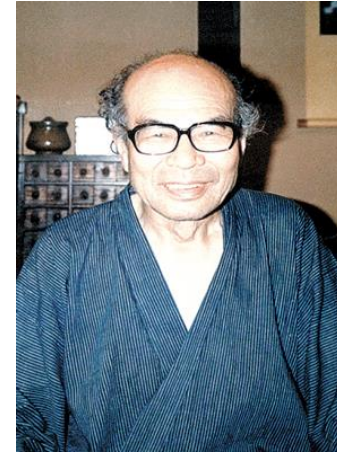


カレー屋の「デリー」。染色家で松本における民芸運動の中心メンバーであった三代澤本寿のご子息が経営。黒漆喰のナマコ壁はひと際存在感がある。



丸山太郎と松本民芸館

「ちきりや工芸店」を開いた丸山太郎は、卵殻・螺鈿細工や版画の制作をする一方で、1962年には、自ら蒐集した民芸品を収めた「松本民芸館」を松本市郊外の山辺に開設する。なお、同館は1983年に松本市に寄贈され、今日に至っている。



柳が愛した民芸の町・松本



松本には、三代澤、丸山、池田という民芸運動の先達の意志を受け継ぎ、今も街や暮らしに民芸運動の考えを活かそうという人々がいる。それが今の松本の街の財産となり、「民芸のまち・松本」の礎にもなっている。

さいごに

- 倉敷の大原総一郎(日本民芸協会二代目会長)が指摘するように、「街づくり」において大切なのは、経済至上主義に陥らないことであり、経済・文化・道徳が調和した街づくりの理念を持つことである。
- 柳宗悦の説く民芸の思想や精神には、そうした街づくりの理念に副うものである。それは、倉敷や松本などの例を見ても明らかかなように、経済・文化・道徳の調和を生み出す。
- 「街づくり」には、行政の協力は不可欠であるが、それにもまして重要なのは住民の意識である。街での活動や暮らしの中に民芸の精神を活かそうという人々の存在が、今日の「松本の街の財産」となっているのだ。

日本民芸館HP、倉敷民芸館HP、松本民芸館HP
及び、「松本市公式観光情報ポータルサイト」や
「倉敷市公式観光サイト」などより、画像を借用さ
せていただきました。